平成 30 年度長崎大学がんプロ養成基盤推進プラン在宅・地域医療実習

実習生：高比良　飛香

実習先：ホーム・ホスピス中尾クリニック　　中尾　勘一郎先生

　　阿保外科医院　　阿保　貴章先生

　　安中外科・脳神経外科医院　　安中　正和先生

実習期間：2018 年 9 月 18 日～ 2018 年 10 月 10 日

【実習内容の概要】:

天高い鰯雲の下、もしくは肌寒い秋雨の中、４週間に渡って長崎市内および郊外の３つの医院で合計 10 日間、午後の訪問診療に随行させていただきました。

平生、私は大学病院で放射線治療に従事しており、担当する患者さんの大半は担癌患者さんです。担当していた患者さんを在宅で看取っていただいたこともありますがほんの一例で、実際どのように診療されているのかは漠然としており、実際の場を経験できたことは非常に勉強になりました。

ホーム・ホスピス中尾クリニックは長崎市から長与町に入ってすぐのところにあり、長崎市北部・式見地区～三重地区～琴海地区、長与町、時津町といった広い範囲をカバーしておられました。クリニックの敷地内に入った瞬間、印象的だったのは可愛い平屋建てを囲むように広がる綺麗な緑の芝生と、夏の名残の鮮やかな百日紅の花でした。それはクリニックに併設された「ふらっと・ほすぴす希望のひかり」という、開かれたボランティアスペースで、建物の中に入ると暖かく穏やかな時間が流れていました。

いのちに関わる図書コーナーを備えていたり、お祭りや、健康や生活に関わるイベントも開催されていたりして、私も午後の診療が始まる前の短時間だけでしたが、管理栄養士の先生が講師をされる料理教室に参加させていただきました。こうした空間の提供も含め、診療に随行して感じたのは、中尾先生と緩和ケア認定看護師の黒田さんが如何に患者さんとご家族の生活に密着しているかということです。他のクリニックの先生方も同様でしたが、在宅での輸液や輸血、ストーマ等の管理だけでなく、食事のこと、患者さんの趣味や楽しみとなることなどもよく把握されており、それらに触れながら診療されていました。それは私が病棟で患者さんと話をするときよりも具体的に介入されており、まさに生活の中に入って診療されているのだということ、大学病院では治療や医療者との関わりがその患者さんの大部分を占めているように錯覚してしまいますが、実際のところは、医療は患者さんの生活や人生を支える一部分であることを実感させられました。

阿保外科医院は東長崎が診療の場で、「日見トンネルから多良見までが守備範囲」とのことでした。外科の先生の強みとして、手術から日が浅くドレーンチューブなど留置したままの患者さんも在宅で受け入れられることに凄いなと感服し、ベースに認知症のある患者さんなど、早く自宅に帰った方が状態の安定する患者さんは是非そうしたいとおしゃっていたのが印象的でした。誰もができることではないと思いますが、そうして阿保先生に診ていただく患者さんは、ご本人もご家族も幸せだなと感じました。

担癌患者さんではありませんでしたが、非常に印象的であった方がいます。

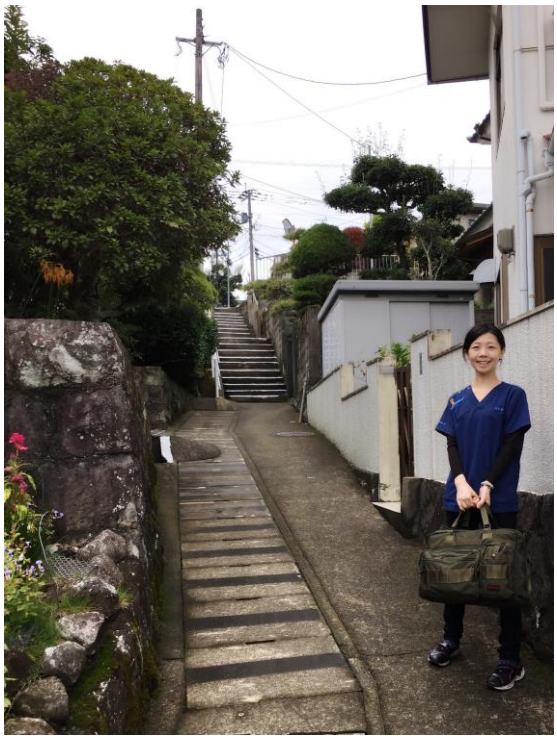
90代のご夫婦の両方を在宅診療しているご家庭で、ご主人の方です。３連休の最終日である月曜日に高熱や意識障害で、ご家族から阿保先生へ連絡。直前に背中を痛がっていたとのこと、以前も同様のエピソードがあり、すぐに急性腎盂腎炎の診断に至り、ご自宅で抗生剤が開始されました。私が一緒に訪問させていただいた水曜日には、患者さんは点滴は継続されながらもリビングのソファにゆったりと座り、お好きな相撲をテレビで観戦されてニコニコされていました。この患者さんが、初診の急性期病院に運ばれていたなら…と想像すると、、周囲の環境を変えずに速やかに対応できることの素晴らしさを実感しました。さらに翌週に伺った時には、ソファの背もたれに凭れかかることなく、シャンと座ってすっかりお元気な様子で迎えてくれ、非常に感動しました。

日常の訪問診療だけでなく、新規に介入する方の在宅合同カンファランスにも、随行させていただく機会がありました。気管切開、人工呼吸器導入後の自宅退院予定で、現在入院中の病院主治医、担当看護師、ソーシャルワーカー、在宅側の訪問看護師、理学療法士、医療機器メーカーの方など多くの職種が参加し、現状の確認や今後の方針等だけでなく、災害で停電になった時など緊急時の対応など、具体的に話し合われていました。この患者さんは翌週の試験外泊の際に訪問させていただき、その時には緊急時の必要物品の置き場や、日常生活の上でQOLを保つための自宅内の環境の整え方などまで考えられていました。

そういったところも含め、阿保先生は非常に丁寧に診療にあたられていたのが深く印象に残っています。

安中外科・脳外科医院は以前、担当の患者さんの在宅診療を受けて下さったことがあり、長崎の街中にある医院で、市内の在宅を見てくださると漠然と思っておりました。しかし、同行してみるとその範囲は非常に広く、坂ばかりの長崎市街地はもちろん、長崎南部は野母崎地区から、北は琴海地区までを網羅されており、しかもその中でみる患者さんの数は膨大で、それを全て把握されている先生は本当に凄いと思いました。

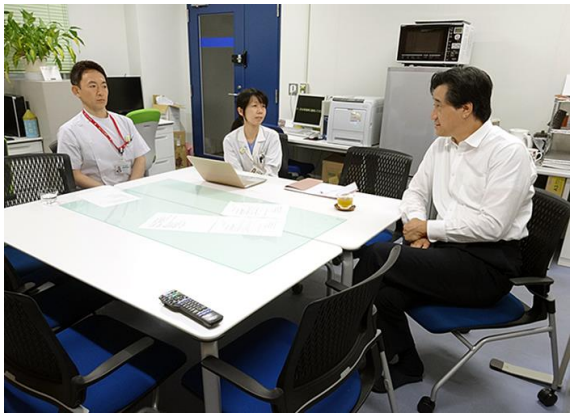
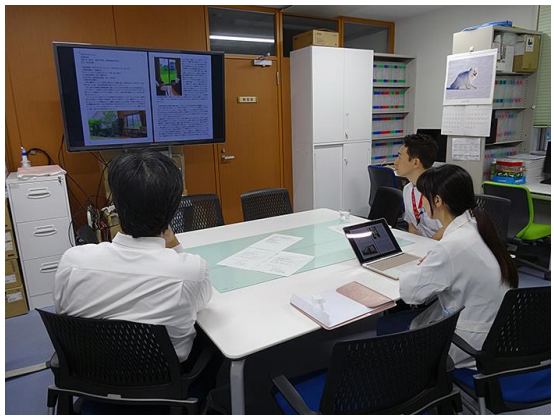
どの先生も往診バッグはずしりと重たく、それが先生方の診られている命の重さを表しているようにも感じましたが、その中でも特に重いカバンをひょいと片腕に担いでぐんぐんと坂を登っていく先生の姿はなんとも勇壮で、畏怖の念さえ抱くほどでした。そんな後ろ姿とは裏腹に、フットワーク軽く、軽妙な話術で本当に多くの患者さんに対応されており、この坂の町でご自宅で過ごせるのは安中先生のおかげだという方が沢山いるのだな、先生はまさに長崎の地域医療を支えられている方なのだと感じました。



3つの医院で共通していたのは、在宅の先生は患者さんご本人だけでなく、ご家族も引っ括めて診ている、生活や人生そのものを診ているということでした。普段の診療で私も気にかけていることではありましたが、そんな付け焼き刃で

はなく、まさに居住空間の中に入ってそれを実践されていることに感銘を受けました。

　最後に、深く心に残った言葉があります。
「患者さんたちが先生たちの診るような病院に行く時には、一張羅を着て精一杯元気出して行くんだよ。『治療できません』と言われたくないから。家に帰ってきたらぐたーっとして、動けなかったりする。それを先生たちに知ってほしい」と。
「治療をする為に生きているのではない。生活をよりよくするために治療をするのだ」
　これを胸に置きながら、私もより良い医療を提供できるよう精進したいと思います。

報告会にて